

特集

ボランティアの絆をつなぎ続ける ～社会的距離を保たざるを得ないなかでの取り組み～

新型コロナウイルスの影響により、今、人と人とが互いに距離を取り、接触する機会を減らすことが求められています。人と人とのつながりにより活動を生み出していくボランティア・市民活動は、これまでにない活動への制限が生じ力を発揮できない状況にあります。

一方、各地でさまざまな工夫やアイデアを重ねながら、つながりを途切れさせず、生活が立ちいかなくなったり、孤立してしまいかねない人々と新たにつながろうとする活動も生まれています。

今回の特集では、現在の新型コロナウイルスの影響下で、これまで取り組まれてきたボランティア活動を続けたり、インターネットによる→新しいコミュニケーションの手段を活用して取り組んでいる実践を紹介します。

事例1

宮崎県・三股町社会福祉協議会「みまたん宅食どうぞ便」 ～ボランティアの協力で寄せられるニーズを、具体的な支援につなげる～



「みまたん宅食どうぞ便」社協チームメンバーの皆さん
前列左から 長野巻穂さん、内窪弘子さん、吉田真奈美さん
後列左から 松崎亮さん、川崎紀久さん、坂口幸一郎さん、崎田宏友さん

宮崎県三股町は、都城盆地にある人口25,467人（5月現在）の町です。高齢化率は約27%、比較的若い住民が多く暮らしています。

三股町社協では、2018年5月から「みまたん宅食どうぞ便」（以下、どうぞ便）を実施しており、地域のボランティアの協力を得て、希望する子育て世帯に月1回無料で食材を提供するとともに、配達を通じて把握したニーズを支援につなげています。現在の新型コロナウイルス影響下での対応もあわせて紹介します。

ホームページ<https://minata-douzo.com/>
「みまたん宅食」で検索
フェイスブック、LINEでも発信中

食でつながるアウトリーチの形

どうぞ便は、生活が大変と感じる町内の18歳以下の子どもがいる世帯に、月1回、世帯10食分の食材を無料で届ける活動です。2年前の事業開始時は13世帯・対象者は約30名でした。現在は50世帯・対象者約200名に広がっており、1回あたりの配達数は2,000食に及びます。利用世帯の8割がシングル（母子・父子）世帯です。

どうぞ便の事業を中心に担うのは、町社協で生活支援コーディネーターとボランティアセンター事業を兼務する町社協の松崎亮さんです。社協職員約70名の多くは介護保険事業を担い、松崎さんを含めて約10名が地域福祉活動を担当しています。

三股町では、ボランティア団体や社協が協働して子ども食堂を実施してきました。加えてどうぞ便を行う目的について、松崎さんは「課題がある世帯は見えずらく、また私たちが一方的につながろうとしてもなかなかつながることはできません。だからこそ、できる

だけ自然な形でつながる『アウトリーチ』のしくみが必要だと思っていました。そこで、先行して個別に食材を届けるアウトリーチのしくみを構築していた文京区の『こども宅食』を参考に、ボランティアと連携しながら『食』で個別につながることを考えました」と話します。

実施にあたり、地域に受け入れられる名称を考え、専用ホームページからの申し込み画面作成、フェイスブック（Facebook）やライン（LINE）などのソーシャルネットワークキングサービス（SNS）を活用した案内を工夫しました。松崎さんによると「子育て世帯の利用ということもありますが、現在、どうぞ便利用者の9割がインターネットを通じた申し込みです。これまで社協と全くつながっていない世帯と関係を築けています」とのことです。インターネットやSNSと合わせて、チラシも大切な宣伝手段として活用しています。町と連携し、町事業で保健師が乳児世帯を訪問する際に、QRコード

が入ったどうぞ便の宣伝チラシをさりげなく世帯に置いてもらうなどの工夫も行っています。利用申込があると、社協職員がメールや訪問を通じて申込世帯の状況を把握し、どうぞ便の利用が始まります。

地域の幅広い関係者とボランティアが協力

どうぞ便の食材確保は、地域の生産者の協力を得るとともに、町内の社会福祉法人による法人貢献事業による支援、そして町内企業からの支援が加わります。地元の食材を使用して、住民やボランティアが製造する味噌も配っています。

月1回のどうぞ便実施にあわせて、食材を仕分けるボランティアが約20名、配達を行うボランティアが約15名関わります。ホームページを通じてボランティアを希望し、仕分け作業を手伝う住民もいます。配達する食材にあわせてボランティアの管理栄養士が監修した手作りの調理レシピ（メ



書籍紹介

『月刊福祉』2020年6月号（全社協出版部） 価格1,068円（本体971円）

特集は、「ボランティアの潮流」。ボランティアを巡る節目となる事柄を振り返りつつ、そのあり方を問い直し、ボランティアの今後の方向性を考察。

（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）